お似合いな

Ruka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お似合いな

【Ｎコード】
Ｎ１４２５Ｖ

【作者名】
Ｒｕｋａ

【あらすじ】
「――私、江戸川君と付き合うことになったわ」先日、歩美は哀にそう告げられる。「そうなんだ！！　よかったね、哀ちゃん！」そのとき、私が無理して笑って祝福したことを、聡い彼女は多分気づいていたと思う。
お似合いな二人（＝コナンと哀）と歩美の恋愛です。

※これは私のブログから持ってきた小説です。

お似合いな？

「ねえねえ歩美、コレ超よくない？」

「え、どれどれ？」

歩美は今日、同じテニス部の伊藤有咲（いとうありさ）と近くの店に買い物にきていた。ウインドウショッピングの予定だったが、かわいい品物があったのでついついたくさん買ってしまう。

「このシルバーのポーチ！」

「あ……」

それは確かになかなかよいデザインのポーチだった。シルバーの地にラメがかかっており、キラキラと輝いている。

「うん、いいと思うよ」

「でしょ？　じゃあ買っちゃおっかな～♪」

有咲はそのポーチを手にとって、嬉しそうにしながらレジに向かっていった。

「はぁ……」

有咲の姿が見えなくなったところで、歩美は深く溜息をついた。

どう見てもあのポーチは有咲には合わない。有咲はどちらかというと『綺麗』ではなく『カワイイ』の部類で、あの綺麗なポーチはどう考えてもまだ中学生の人間には不釣合いだった。

（――でも、一人だけ）

あのポーチの似合う大人っぽい中学生を、歩美は一人だけ知っている。たくさん綺麗な人を見たけれど、だれ一人としてあの人の美しさと大人びた雰囲気にはおよばなかった。

（――哀、ちゃん）

灰原哀のまとうオーラは、なんだか大人びていた。そう思っているのは歩美だけではない。元太や光彦、阿笠博士や蘭や警察などの大人たちも彼女の雰囲気にのまれている。

そして、彼女と似たオーラをもつ、江戸川コナン。彼は、歩美の初恋の相手だった。

コナンと哀は、先週から付き合い始めている。そのことを哀から聞いた歩美は、そのときは「おめでとう」と祝福したけれど、本当は泣き出したい気分だった。でも、二人の幸せそうな空間を壊すわけにはいかなくて、家に帰ってからベッドにうつぶせになって泣いた。

正直言って、哀を恨んだりもした。

「なんで、私の好きな人を奪うの？」って、わめいて罵りたかった。でも、そんなことをしたらコナンが悲しむのは目に見えているし、何より大好きな人たち（コナンとあい）と口を利きづらくなるのが嫌だった。歩美は哀も大好きだったから、そんな大好きな二人とケンカして仲が悪くなるなんて絶対に嫌だった。

それから歩美は二日、学校を休んだ。学校には風邪だと言って。頭が混乱していて、気持ちの整理をつけたかった。もうコナンが一生自分のことを想ってくれることはないんだと思うと、無性に悲しくなった。

歩美が学校に行かなくても、歩美の母と父は何も言わずにいてくれて、それが嬉しかった。元太や光彦の励ましもあり、気持ちが落ち着いてきた歩美は、いまはまた学校に来るようになった。

「はぁ……」

歩美は再び深い溜息をついた。

「なんで、私じゃないんだろう……」

そんなのは、もうとっくの昔にわかりきっていた。二人には決して他の人の犯すことのできない、二人だけの世界がある。

そこに入り込むことなんて、できない。誰にも。

「失恋、決定だなー。……」

歩美が呟いた、そのとき。

「あれ、歩美？」

歩美の後方から、大好きな人の声が聞こえた。

お似合いな？（後書き）

どーも、Ｒｕｋａです！
こんにちは！

今回の「お似合いな」は、私の投稿作品二作目になります♪
一作目は「永遠に……」です！
もちろん、こちらもコ哀小説！！！！
まだ見ていない方はぜひ読んでみてください♪

なんか、この調子でいくと、二作目の話のほうが早く完結しそうです……。
というか、「永遠に……」が、超長くなりそうです（汗
話の構成とか、ラストとか、全然考えずに投稿したので……。
その点、「お似合いな」は私のブログに掲載していたものを、ちょっとだけ手直しして投稿しているので、話はもうできてます。
途中で放棄する確率はほぼゼロですので、ご安心を。
更新ペースもけっこうはやくできそうです☆

あとがき長くてすみません。
これからもＲｕｋａの作品をよろしくお願いします。

お似合いな？

「――歩美？」

「……コナン君？」

突然のコナンの登場に、歩美は目を瞬かせた。

「……なんでここに？　ひとり？」

この店は女子向けの店で、男一人で入るにはかなりの勇気がいる。

「いや、今日はあいつとデート」

コナンの言う『あいつ』とはいつも哀のこと。それを理解してしまう自分の脳内が恨めしい。

「――へ、へえ。哀ちゃんはどこにいるの？」

「ああ、なんか店入るときまでは一緒だったんだけど、なんか急に『ついてきちゃダメ。十五時に外のカフェで待ち合わせ。遅れちゃダメよ』って言われてよ。暇だから一人で三十分間フラフラしてた」

コナンの話をきいた歩美は、瞬きを数回繰り返し、不思議に思ったことを口に出した。

「……それって、デート？」

「の、つもり。俺はな」

「話を聞く限りでは、私には全然デートに聞こえないんですけど」

「……デスヨネ、やっぱり」

コナンと哀が付き合っていると聞いてから、なんとなく歩美はコナンと話しづらくなっていた。避けているというわけではなかったけど、コナンと哀の二人の間に自分が割り込んではいけないような気がしていた。こんなに笑いあって二人きりで話すのは久しぶりだった。

コナンと歩美がしゃべっていると、レジに行っていた有咲が戻ってきた。

「ごめん、歩美。やっぱりあのポーチ、私には似合わないと思って、返してきたわ。――って、その人」

有咲の視線が、コナン君のところで止まった。

「え、ああ、有咲にはまだ紹介してなかったっけ。こちら小学校のときからの友だちで――」

歩美がコナンのことを紹介する前に、有咲は顔を輝かせ、興奮した様子で口を開いた。

「江戸川コナン君！　いつもテレビで見てます！！　私、超ファン

なんです！！　握手してください！！」

顔を真っ赤にさせて手を差し出した有咲に、歩美とコナンは呆然とした。

「えっと……」

突然の有咲の行動に、コナンは少々困惑気味の顔をしていた。

「あ、ちょっ……なにしてんの有咲！？　コナン君困ってるでしょ？」

「え？　あ、ごめん。つい……迷惑だよね」

コナンの困惑に気がつき、あはは、と無理に笑って引っ込めようとする有咲の手を、とっさにコナンがつかんでぎゅっと握った。

「いや、全然迷惑なんかじゃないぜ。ちょっと突然でびっくりしただけ。いつもテレビで見てくれてるんだ。ありがとう」

にっこりと優しい笑顔を振りまくコナンに、歩美と有咲は一瞬で心を奪われた。

有咲は、「こんなかっこいい人、この世にいたんだ……」という顔をしている。

「あ、もうちょいで約束の時間だ。あいつんとこ行く前になんか買っていくか……」

ケータイで時間を確認したコナンは「それじゃあな」といって歩

美と有咲に軽く手を振り、そのまま店内を見はじめた。

コナンは、後姿もやっぱりかっこよかった。周りの人もつぎつぎ振り向いてコナンを見ている。

（やっぱりこの気持ちを諦めるなんて、無理だよ……）

歩美は改めて、この想いの強さを理解した。

お似合いな？（後書き）

Ｒｕｋａです♪

『お似合いな？』を見てくださり、ありがとうございます☆

『永遠に……』では、コナンと哀の絡みがまだ全然でてきていなかったので、「なんか超コ哀の話かきたいな～」と思い、この話を制作しました。

次回もよろしくです！！

お似合いな？

「ありがとうございました」

女性定員の高い声を聞きながら、コナンは店を出た。女子ばかりで本当に気まずかったが（しかもみんなチラチラコナンのほうを見てきていたので、コナンは「今日俺顔になんかついてるのか？」と間違った解釈をしていた）、これも哀のためだと思ってはやく店を出たいという考えを必死で振りきった。

（……なかなかいいのがあったな）

さっき買ったものに、得に深い意味はなかった。本日五月四日は、哀の誕生日でも、クリスマスでも、何かの記念日でもない。特別な日ではなかったが、コナンは何となく、もう今日を逃したらあの哀にぴったりなものがもう見つからないような気がして、衝動買いしてしまった。

……一瞬、ふっとなにかがコナンの脳内を横切った。

（……五月四日って、何かの日だった気がするんだよな）

それがなにか思い出す前にコナンは哀との待ち合わせ場所に到着した。

「ただいまの時刻、十五時四分三十六秒。遅いわよ」

「秒って――」

カフェのドアを開けると、そこにはすでに哀がいた。俺が遅れたせいか、不機嫌な顔をしている。

「わりぃわりぃ。んな顔すんなよ」

「これが地顔ですけど。なにか？」

最近、無表情な哀の心情が読めるようになってきた。「これが地顔ですけど」といっても内心はかなり怒っている。

「……えーっと、何で今日はそんなに不機嫌なんでしょうか？　灰原サン」

「……あなた、今日が何の日か知ってる？」

「へ？」

哀の口から出たのは、俺が予想していなかった問いだった。

「それがわかるまで許してあげないわ」

「……えーっと……今日は……」

哀がコナンの顔をじっと見つめてくる。彼は哀に見つめられて集中できていない。

コナンは必死で考えたが、全く答えがわからない。それに、なんだかさっきから頭の奥に引っかかっているモヤモヤがなかなか取れない。

（――……どっかの難事件を解く方が、よっぽど簡単じゃねぇか！？）

とりあえず、このままでは答えが導き出せそうにないので、気分を変えようとコナンがあたりを見ると、カフェのテレビの何かの番組で『今日は何の日でしょう？』というクイズをやっていた。

すると、若い女性タレントが早押しボタンを押し、「中学生探偵、江戸川コナン君の誕生日です！」と言う。

「……俺の……誕生日？」

「ご名答」

哀はコナンの顔を見てふふっと笑った。

「まったく……。あなたって人は、本当に毎年毎年自分の誕生日を忘れるのね。蘭さんや有希子さんからそのことを聞いていて、いままで半信半疑だったけど、事実だということがわかったわ」

哀はさっきの不機嫌な顔を払拭し、にこやかに笑った。

「誕生日おめでとう。江戸川君」

コナンは、ふわりと花のように笑って自分の誕生日を祝福してくれた哀を、好きだと思った。

「――ありがとう。超嬉しい」

気づけば、コナンは哀を抱きしめていた。

「ちょ、江戸川君――」

当然、まわりはなんだなんだと騒ぎ出す。

「あの人江戸川コナン君よ！　中学生探偵の」

「わーホントだー。テレビで見るよりかっけーな！」

「え、お前問題はそこかよ！？　違うだろ。スキャンダルだよ、スキャンダル！　ホラ、女と抱き合ってる！」

「えーうっそー！　私超好きだったのに～」

騒がれることの嫌いな哀は、コナンの方を見た（見られているだけなのに、なぜかコナンは睨まれているように感じた）。

「……なにをしてくれるのかしら、江戸川さん？」

そのときの哀のにっこり笑った顔といったら、もうそれは鬼の形相の方がよっぽどマシなほど酷かった、と江戸川氏は後に語った。

お似合いな？（後書き）

こんにちは。
「お似合いな？」です。
なんかだんだん話が長くなっていく……。

お似合いな？

月曜日、学校に行こうと工藤邸のドアを開けたコナンを待ち受けていたのは、ものすごい数のパパラッチだった。マスコミがかぎつけてくるとは思っていたが、まさか数がここまで多いとは思っていなかった。

『江戸川コナン君！　昨日、女性と抱き合っていたという噂は本当なんですか！？』

『あの女性は誰なんですか？　彼女ですか？』

『全国の女性ファンに向けて一言！』

彼らはさまざまなことを言って、素早くコナンの周りを取り囲んだ。

「すみません、俺、学校にいくんで」

そういって、コナンは彼らをかわそうとした。しかし、しつこくついてくる。

『あのカフェにいた人がケータイで画像をとって、番組まで送ってきてくれましたよ？』

『この女性は同じ年ですか？』

つぎつぎと自分の前に突き出されるマイクを見て、コナンはイライラした。しかし、こんな全国に放送されるテレビカメラの前で怒鳴るわけにはいかず、早足で学校へ向かった。

『江戸川君！　待ってください！』

『江戸川く～ん！！』

学校に着き、やっとパパラッチの追跡を逃れたコナンは、さらに歩く速度をあげて教室へ向かった。

「おーっす、江戸川！　今日の新聞、見たぜ！」

「相変わらずすごい人気だな！　ていうか彼女のこと全国に知られちゃってんぜ？」

コナンがドアを開けると、やっぱり教室内もコナンと哀が抱き合っていた話でもちきりだった。コナンはちょっと現実逃避して、苦笑いした。

「……やっぱマスコミの情報ははえーなー」

「……オイ、なにのんきなこと言ってんの、江戸川。お前の彼女、今朝早く学校に来たけど、超機嫌悪そうだったぜ？」

コナンのクラスメイト、上原（うえはら）（あとで歩美から聞いて知ったが、有咲のいとこらしい）の話によると、いつもコナンと一緒に八時くらいに登校している哀は、今日は一人で七時半頃来ると、同級生達

の質問攻めを無視して上原のところに行き、「江戸川君に『いつものところにいるから、あとできて』って言っといて」と伝言を残し、どこかへ去っていったという。

「ありゃー相当キレてたな。お前、彼女があーいうの嫌いなの、知ってただろ？」

「……知ってたけど、なんか哀の笑った顔を見たら、止まんなくなっちまってよ」

「……前からおもってたけど、お前かなり重症だな。ヘンタイ」

「なっ……ヘンタイ言うな！」

なんだかんだ言いながらも最後はちゃんと上原に礼を言い、コナンは哀のところへ向かった。

「えっと、いつもの場所は――」

そういいながら階段を上る。コナンと哀の秘密の場所・屋上のドアを開けると、そこにはやっぱり哀がいた。

「――よう」

コナンは最初にどう声をかけるべきか迷ったが、やっぱり普通にすることにした。

「よう、じゃないわよ。こっちは、あなたがしたことのせいで大変迷惑しているのですけれど？」

哀の話を聞くと、朝起きれば歩美やフサエさん、いつも買い物に行っているスーパーのおばさんからなども「あら、ラブラブね～」というようなことを言われ、このままだと自分も朝パパラッチに追いかけまわされると思った哀は、朝早くに家を出てきたそうだ。しかも、学校にくる道中会った人たちも、ちらちら哀のほうを見てきて、「あの子、新聞に載ってた子じゃない？」とか囁いていたそうだ。

「まったく……どう責任取ってくれんのよ」

「――わりぃ」

コナンは珍しく素直に謝った。その様子を見た哀はふっと笑った。

「まあ、いいわ。今回は許してあげる。――ちょっと嬉しかったしね」

「え？」

「だって、これであなたに告白する女子の数も減るでしょ？」

「――もしかして、嫉妬――してた？」

コナンは。いつも気になっていて聞きたかったけど、聞きにくくてなかなか切り出せなかった話題をきり出してみた。

哀のほうもちょっと答えにくかったみたいで、しばらく俯いていたが、顔を上げてコナンのほうを見ると、顔を赤らめながらもはっきりと告げた。

「……ええ、まあ。そりゃ、彼女ですからね。嫉妬くらいするわよ」

それを聞いたコナンは、舞い上がった。

「マジ……？」

実のところ、コナンが毎日のように昼休みや放課後に告白で呼び出されているのに、全然表情を変えない哀に、自分のことをなんとも想っていないのではないかとちょっと心配していた。

「やべぇ、……超、嬉しい」

気づくと、コナンはまた哀を抱きしめていた。

「ちょっと……江戸川君」

昨日のように抵抗されるかと思ったら、哀は意外とおとなしかった。

「……こんどから、みんなの前で抱きしめたりしちゃダメよ」

――二人きりのときなら、いいけど。

哀の言ったその言葉に、コナンは更に強く彼女を抱きしめ、かすかに開いた唇に軽く口付けた。

お似合いな？（後書き）

こんにちは！
Ｒｕｋａです。
これから学校に部活しに行ってきます！

次回で完結（予定）です。
最終話もよろしくお願いします。

お似合いな？

朝に哀を探しにいっていなくなったコナンと、朝早く来たらしく今日は一回も姿を見なかった哀が戻ってきたのは、一時間目の数学の授業がとっくに終わった十分休みの頃だった。

「コナン君！　哀ちゃん！　いままでどこにいってたの～？　先生怒ってたよ！」

「あはは、わりぃわりぃ」

「ごめんなさいね、吉田さん」

「おかげで私と元太君、先生に質問攻めにされて大変だったんだから！」といってぷんぷん怒る歩美に、コナンと哀の二人は妹を見るような優しい目を向け、少し笑った。

「まったく、どうせ二人で屋上に行っていちゃいちゃしてたんでしょ！」

歩美の予想は当たったようで、二人は目を見開いて驚いた後、かすかに顔を赤くした。

「あーもう！　その様子は図星だ！　まったく、学校でイチャイチャしないの！　みんなに見せ付けちゃって！　あ～私も早く彼氏ほし～な～」

歩美のその言葉に反応し、コナンと哀はじっと歩美を見つめた。

「だめだって！　そんな簡単に彼氏とか決めるな！」

「そうよ、吉田さん。こういうのは焦らずゆっくり……」

このとき歩美は、この二人が歩美のことを好きな男子を片っ端から脅して告白させないようにしているなんて知らなかった。

あとで光彦と元太からそのことをきいた歩美は、コナンと哀を呼び出して説教した。

・●・●・

――二日後。

体育の授業の後にトイレに行った歩美は、哀が鏡の前で化粧をしているのを見た。歩美は、哀がもっていた、化粧道具を入れるポーチに目をやった。

それは、この前歩美と有咲が買い物に行ったときにあったあのシルバーの大人っぽいポーチだった。

きっと、コナンが哀にプレゼントしたのだろう。でも、なぜか知らないけど、歩美は急に、不思議と嬉しくなった。

だって、哀ちゃんに一番よく似合うもん。

――そのポーチも、コナン君も。

正解で一番、お似合いな二人だから。

（お似合いな・完）

お似合いな？（後書き）

どーも、Ｒｕｋａです。

『お似合いな』は、これで完結です！
ここまで読んでくださった方、どうもありがとうございました。

『永遠に……』のほうはまだ連載してますので、これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1425v/

お似合いな

2011年10月9日07時38分発行